兵庫生物 12 (5) ：293－294，2004

瑠璃寺のスギ

室井　　綽

先年，佐用郡寺へ参詣した。ここは，スギとサルの名所で，寺までの参道は，巨大な杉並木で知られている。ここの日本代表のオモテスギは数人で抱えるような大きなものである。一行は，寺に参り，サルの行動を楽しんだのち，谷深く進んだ。谷を右へ右へと進むと，オモテスギの1mほどに伸びた苗場のようなところへ出た。そこはこのスギの苗場ではなく，銘木瑠璃杉の採種場所であると聞いて二度びっくりした。

筆者の今までの頭の中にはあの巨樹の下枝までが7～8mもあって，その巨木によじ登る人は地元のO氏だけで，それも命綱を使ってのことであった。

筆者がO氏の木登りを見せてもらったのは，30余年前のことで，この巨木に直径3cmほどの綱を，上下に二輪に巻きその下に巻いた一部に足をかけ，このふた巻きの綱の上に交代に乗って上へ上へと登っていった。最下枝のところまで7～8mをスルスルとわけなしに登られた。枝につかまるとあとは，サル以上のすばやさで，のぼりつき梢端の種を採る。1本の梢端を採り終ると隣りの木に綱をかけて勢いをつけてジャンプし次々と老杉に移る。見ている方がはらはらするすばらしさである。

O氏の使用する綱こそ，命綱で，誤ると生命はない。このようにして，一度登られると樹上で働き，つぎからつぎへと梢端の種を採って夕方まで，樹上の散歩である。

先般，この離れ業をみたとき，五十嵐播水先生の主宰する『九年母』645号に

杉の種を採る命づな確かめて

石橋澄枝

という俳句をみつけた。

上の短いながらも俳句を詠むと，人の心を強く打つオモテスギの種を採ることを17文字に圧縮し，最少の文字で表した実感のこもった句である。まったく，文字の手品師である。

スギの種は，大木の梢端からをとったものを，蒔いたときの生長が特によく，将来，巨木になる素質があるが，同一株であっても梢端ではない枝先の種を採って蒔くと伸びがないのである。また，挿木苗について梢部のものを挿木するとよく生長するが，横枝を挿すと巨木になる可能性が少ない。

この採種用の小苗というのは，あの60mにあまる巨樹の梢を切って地に挿したもので，この小苗は，母樹が300歳であると，5年前に挿木した由であるから305歳となる。したがって，大きく伸びる素質が完全に伝わっているのである。このように直立の梢から採った苗を幹起原といい，大きくなる素質を受けついでいる。しかし，下部（側枝）の枝を挿木すると何年たっても枝並みに斜上して大きくならない。これを枝起原という。

また，イブキも生島などでは巨大なものがみられるが，大木の側枝を挿木するとあまり大きくならずカイズカイブキといって庭園によく植えられる。さらに，イブキの下枝を挿木するとタマイブキといって高さ40～50cmで，まるで別種のように可愛いので道路の境界などの植え込みにされている。これは枝起原の代表である。

この原理が最初に発見されたのはアラウカリア，またはナンヨウスギとよばれている。モミやスギの近縁種である。

アラウカリアといえば，ペルー国出張時の庭園を思い出す。というのは，この植物の茎はほぼ10cmと一定にして10m以上も伸び，水平に枝を張っているものが少ない。日本のように台風のある国では，想像もできない。ちょうど日本の竹のような姿勢で，細長く，まっすぐに，すくすくと伸びて，日本の樹木などと比較にならないスマートさなのである。このアラウカリアというのは日本のスギのような木であるが，幹の太さと枝の太さの差がないといってよい。

砂漠の中の大庭園の中にはかならず本種が植え込まれていて絵のように美しかったことを思い出す。

つづいて日本樹木で幹と枝との差のあるのは，イチイとキャラボクの関係である。イチイは強い光沢のある材で神官がシャクにしている木である。日本の中部から北部に行くと巨木がよくみられ，庭木として第一等の木である。ところがキャラボクは細い幹が斜上し，生花材などにするが太いものにならない。植物学的には茎の大小の懸隔をのぞいては花も種もまさに符合するものである。こんな性質が，裸子植物のような進化の低い樹木ほど強くみられるということは不思議である。

しかし，美しく花の咲く被子植物ツツジにも，この関係はいくらか残って挿木苗の選択にも実行されている。

サツキの挿木苗を作るときも幹上のよい苗となるものは枝の先端につく3枚同型同大の葉をつけるが，斜上する枝につく葉は2枚が普通葉で，あとの1枚が5分の1ほどの小ささである。園芸商は，このあたりのコツを経験上，よく熟知していて3枚同型のものは，かならず自分の挿木用にする。

一般に樹木から種を採るとき，よい樹形に育てるため

には，できるだけ幹の頂上に稔ったものを採って蒔くことが常識となっているのは上に述べた理由による。よい樹を育てることは，よい種から育った苗を選ばなくてはならない。この選定は今も昔も変わらない。

本文は先般出版された内海巧一氏の『船越山の自然物語』(2001) の書物に瑠璃杉が見あたらないので昔を思い出して作文したものである。

オモテスギは，ウラスギに比べると材質が劣り，樹相も悪く緑を欠き，美しさに欠ける。さらに，ウラスギは種も苗も安価なので，今日では六甲山，書写山，その他山地でもウラスギに変わりつつある。また，ウラスギは円錐形に伸びて樹相もよく緑が美しい。